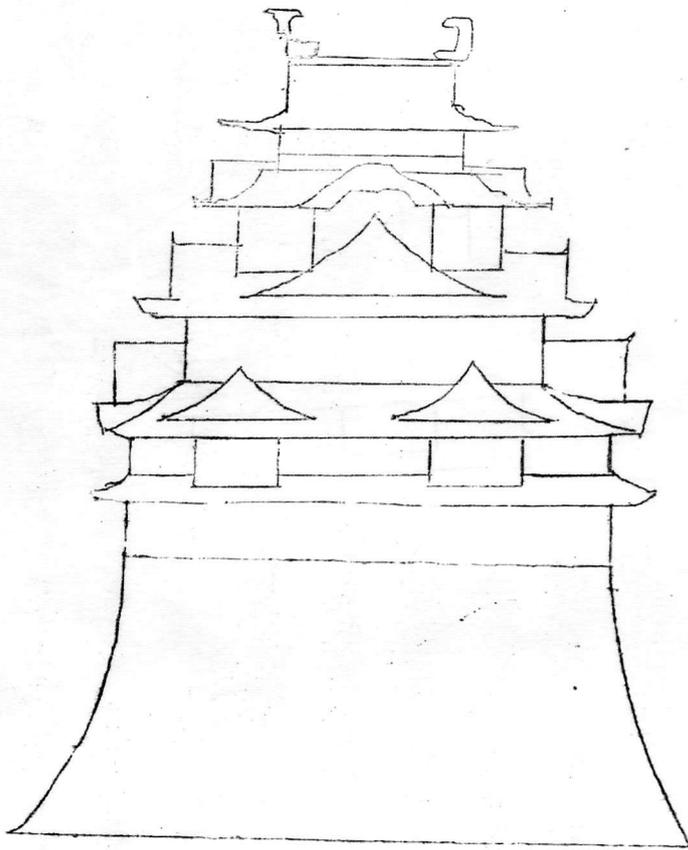


のすたるじす

—新入生歓迎号—



名古屋大学 郷土研究会

3

序

二十世紀、來たるべき二十一世紀とは何であらうか。現代は文明社会という。では文明後社会が来るであらうか。現在の、この二十世紀末期におけるあらゆる分野の科学進歩は異常なまでの加速度をもって展開し、且つその加速度をも増やうとしている。極東日本においても例外的存在は許されない。しかし進歩に逆行し、停滞しようとする、又後退とも感じられる文化・政治・風俗等の萌芽がある。いわゆる昭和元祿の侵襲、アングロ類の流行、ギャンブルの横行、政治家の減少等に、一応これ等の歴史的価値は教世代後の人々によつて判定されるであらう。なぜなら人類の全ての領域は活動し、その運動は三次元空間各次元空間のベクトルとして認識され得るものである。進歩か、後退かは相対的且つ方向性であり、その価値判断は歴史によるのである。人類の歴史の途尾がポテンシャルによるものとすれば、現代社会は今までに公認したことのない險阻な谷を降りているのである。同所にある大なるエントロピーを生産しているのである。人類に対するエントロピーの極大値が存するものは確かなることさえ難しい。しかし人間、一個人に対しては死という形態でして極大値が存在している。生命は自然より高いポテンシャルを持つている。

その故に、負のエントロピーを吸収しながら生命の時間的安定性を、そして非常に困難と努力を犠牲にして運命に対する独自性を保持しようとする。人間は生命体であり、化学結合、あらゆる原子結合の物体である。同時に精神生命体という特殊な一面を持ってゐる。この精神においてこそ個性を考察がなされるのであって、負のエントロピーの蓄積こそが精神の安定化と向上の要素なのである。つまり人間の格一化こそがエントロピーの極大化がテンシャルの差を生むのである。表現を極めれば、個性こそが人間のポテンシャル的安定下あり、精神的躍動のエネルギー源なのである。現代人の疎外感、人間性の喪失に対処する一つの手段は、郷土、郷愁という歴史的要素、理想と実存、観念の中に時間の無時性と空間の無限性を自覚し、負のエントロピーを生命の中心とする。ノスタルジアより生じたもののかすむところです。その中で長い人生の一段落において、精神的対話を行ひ、個性の確立を志し得れば、誠実な生き方になることである。(梶浦博一)

MOZUJI

自己紹介

しゝ・21 北田全

手前、生國と発しますは関東でござんす。関東、関東、関東と言つてもいゝさかゝらうござんす。関東は、埼玉県大宮市ナノ。あとは忘れたから省略)以後、住居を転転転転として現在地(稲沢市日下部町松野)へ移つた。それ故か知らぬが放浪癖があるらしく、よくブライと歩き回るのが好きである。そして人庄において、二高校を出てから大学へ入るまでに道草として、一浪(トナミと書く)である。自己紹介と書けとのことであるが、特技、性質、郷村に入つた理由等はメンドウウサイので省略させてもつう。(知りたひ人は本人とつきあつて

判断して欲しいとの事)

【追加】

合ハイ? いいね、やりましょう

四月三十日カニ限休請利用故、文意不明おしかつず、

オワリ!



刈谷市の刈谷高校の出身。

趣味は読書とマホリ観戦。マーシマン、パチンコ、痴漢……できず。運転免許もたす。ガール・フレンドもてず。国文学の講義は文学部の子に囲まれマナーととれず。

性格は当極的で内向的。朝の朝日新聞ではすわってひきより、まゆりからおしゃべり立ってひきよりを極度に好む。

10月7日生れて、J・F・ケネディをなんとなく尊敬する。アイライク、サニリー

ギター、ガン、マツバラチエコ、を唱

え、小川知子のタバベのひみつを好きだ好きだと言つゝ、△モガ夫人、読みたい人に無料でお貸しします△の広告をかかげさつてきて、てきた彼に、そこはかとな

11日ほど感じる。部屋のないのをなげき、念員に女のうのいないのを悲しむ。

野原と赤き、山を登り

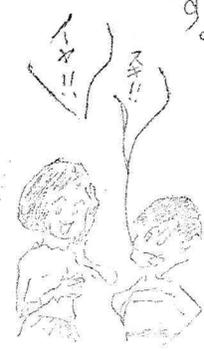
東に豊田市あれば行つてその発展ぶりを見西に関ヶ原あれば行つて夜陣の研究にふける。

新緑がまぶしい……。

×月〇日、寒い朝を歌うY氏に大生の大さを感じ、新たな熱情のわきあがるのをおぼえる。

しつかり、やつてはニラ……ふん思った。郷土の美し……おめるもの……をこの目で見、この肌で感じたりたり……こんなことを思つてみたりました。

△△ ファンレターのおて先は 豊田市丸城町2の48です。



郷土研究会に入会して

51・52 水野猛

名古屋大学に入學して、もう一ヶ月あまり過ぎてしまった。五月の風に新緑の若葉がよよぐ季節になり、あの授験生活も遠い昔の様に思われる。それかといって今の大學生生活が充実しているかと言うとそうではなく、むしろ反対に、合格ボケから抜け出せない自分に少々イラダチを感じている。

さて、このサークルにはいった動機は、と
言うところ……。

合格して、さしあたって考えたことは、勉強の内容はかいてもくわからないので、サークル活動のことであった。高校時代には、クラブ活動で失敗した苦い経験があったのでその原因の多くは自分の心がまえにあつたと深く反省している。真重に學生便覧で比較した。しかし好ましいものがなく、

入學手續日となり、登校してあちこちのサークルに呼び留められ、やっと校外に出た時には最初の真重さはどこへやら、あっさり郷研に決めていた次第である。しかし、入って一ヶ月たったいま、このサークルで活動することが、合格ボケから抜け出し、大學生生活を充実させるのに有効であるように感じている。

孫子 形篇

孫子曰、昔之善戦者、先為不可勝、以待敵之可勝、不可勝在己、可勝在敵、故善戦者、能為不可勝、不能使敵之可勝、故曰、勝可知、而不可為、不可勝者、守也、可勝者、攻也、守則不足、攻則有餘、善守者、藏於九地之下、善攻者、動於九天之上、故能自保而全勝也。

自己紹介

S 1・52 柴田哲雄

最初に柴田哲雄という人物を紹介しよう。昭和24年生まれのいい男とまではいかないが、まあまあというところでもいつておう。義務教育9年として一宮高から今日へ移ってきた男、すなわち時の流れにたんと乗って来た単純、素朴な男である。過去には希望はない。今現在あるのみである。そして未来をたんたんとうかがっている。しかしその中にはでっきとした希望がある。それは人間として生きることである。このきびしい世の中で生き抜くことである。これがこの男の唯一の目標あるいは目的といったものである。一見単純、素朴のように見えるがこれさえ出来ない者が世の中にはたくさんいる。そして一つの目的が達成さ

れたら、次の目的を達成するというのが、この男の性質だ。ちよっといいすぎかな。まあいいや、そのくらいだれでも言うことだ。

では、この男すなわち私の趣味を紹介しよう。趣味というより鑑賞の方であろうか。野球（見る方もやる方も）、映画といったところだろう。この点ではだれにでも負けないうだろう。何しろ負けずぎらいだから、それが私の性質であり、そんな私が好きなんだ。野球といっても、プロ野球の方がいい。そこには大胆さと金がかかっている。それだけに見ごたえがある。映画、だいたい年に40回すなわち80本は見るだろう。しかしあきない。すなわちしんぼう強い。まじめだといえるだろうか。もしそうだといいのだが、他人にはわからない。ただ私だけが知っているのだ。

以上のように人格、趣味について述べさせていたのだが、ここで我が郷土研究会

1 年生の出身校・志望学部・志望学科

池田 全	金沢大学	理学部	理学
杉 和	金沢大学	工学部	工学
平野 敏美	金沢大学	工学部	工学
伴 金	金沢大学	工学部	工学
吉田	金沢大学	工学部	工学
百瀬 敏雄	金沢大学	工学部	工学
木野 猛	金沢大学	工学部	工学
柴田 哲雄	金沢大学	工学部	工学

の寸感を述べよう。始めて先輩達の顔を見た時は一見まじめそうに見えたのだが、コソコソの時にそれはばくろさされた。やはり人間というものは同じなんだ。しかしそこにいいところがある。みんな笑う。そこに人生としての有意義さがあるのだと感じた。

以上で終り

郷研に入って

S1・21 百瀬敏雄

いかなる幸運の女神の引き合せかはからずもここ名大に合格でき、はたまた何の因果であらうか救あるサークルのうちでこの郷土研究会へと入ってしまった。高校時代とは又異なつた一生つき合える友と将来めとるべき女房の良否を着う眼とこれは税金ドロポウと言われぬ口突であるが、このせち辛い世の中で生き抜く知識とバイタリティとを求めて入学したのであるが、ともかくも、おさまるところにあさまさつてやるべきことをやりはじめつつある今日この頃である。(もつとも 全学連デモ、野菜大会、クワス討論、クワス・クワブコンパルで少々疲れたので、小政、長久手の奥地見学を自ら放棄せざるをえなくなつたのは

自己紹介

L1・31 平野善敏

くやんでよくやみきれない気持ちであるが、郷研の卒直な感想を述べよう。とにかくその明るさには驚いた。間髪をおかず流れる笑いに知った人が一人もいないという強烈な孤独を起す間もなくもつす。かりクラブ内にうちとけてしまった。豊田講堂裏の後の新入の時である。そうかとりついでいざ重要な話になれば急に止まる。先輩達も自らそのかきを破って新米と同等な所に自分をおりて接してくれたことに感謝している。歴史というものを政治的事件の羅列としてしか考えず、その時代の大部分の割合を占める民衆というものを見過していったという欠点に気づき、しかもその民衆を考えると、いう立場を身えられたことに対して、価値があると思う。その研究方法も態度も全く知らない自分だが、こっこっやっていこうと思う。個人としては、武田信玄に少なからず興味をもっている。暇な時には自分なりに勉強してみたいとも思っている。

刈谷高校出身・経済学部志望の平野善敏です。このクラブに入って一番やってみたい事は、古墳を発掘すること。今は、関ヶ原について調べたい。ひまな時をみつけたい。図書館へ行ってみたいです。入学したときは何がクラブに入らなければと思つて、学生ホールのクラブ受けつけを放課ごとに見て探していました。最初は写真クラブを見に行つたのですが、先輩が無愛想なので、入ることをやめました。次に「文化サークル」を探しました。そこでこのクラブに入りました。趣味は囲碁、将棋、釣り、野球、卓球等です。将棋をやってみたいかと、株をやりたい。金もうけのためかもしれないが、株をやりた

い。今一つ提案しますが、クラブ全員で一度ボート大会をやってみたらどうでしょう。きつと面白いと思います。優勝者には、飲みたいたけビールをおごってやる。最後に、4年の間になんとかして一度白墳を発掘してみたい。



地元と郷土

三一 33 伴金美

「地元」という言葉にどうも嫌悪をいだく。「地元出身の何某」「地元のため」等々、というのが、どうもその根源らしい。その言葉のもつイメージのなにかしら、見識の狭さを表現するものに反発を感じることからなのだろう。もっとも「地元」という言葉と「郷土」という言葉の間には、まじわりが多少あるから、こんなことをいうのでは「郷研」の一員として批難されるであらう。しかし「郷土」を知れば多少とも「地元」という言葉も好きになれるだろう」と慰めてもらっても、どだい無理な話し。もっとも賢明なる「郷研」の構成員諸君のことだから、この屁理屈？は分かってもらえらると思う。但言いたいのは、自分が、衷心的な要素を性格の中に持っているというこ

と。もつとも迷選型だと思つてもらつては
こまる。複雑多岐な性格の持ち主だから、
不可思議な行動をとる場合があるかも知れ
ないけれども、まあ平均的のところを、と
つてもらえばよいと思う。「郷研」には手
だ片足しかつゝこんでいないので、このサ
ークルの持つ課題を、まだしっかりつか
めないでいる。けれども、これからの活動
の中で自分は自分なりにそれをきずいてゆ
きたい。——とうまい言葉をならべたけれ
ど、行動の中からでしか、アイデアという
ものが、うまれない人間だから、そうせざ
るをえなくなるのは当然。説明会の時「吉
野山から飛鳥の辺を歩きたい」などと言っ
たけれども、これはぜひ実現させたい。同
時にここら付近にも、見るべきところは案
外あるようなので、ヒマさえあれば歩いて
みたいと思う。

】名尤祭 展示計画【

6月8・9日 教養部12番教室

郷土を知ろう！

- section 1 松平氏の発展史
—家康の祖先松平氏と戦国大名との関係—
- section 2 関ヶ原の戦い
—戦いの再現と戦い時の民衆の動揺—
- section 3 当時の三河の民衆とその生活
—一向一揆を基礎として—
- section 4 リラジ紹介
—我がリラジの全貌を紹介—
観光案内

一個の人間

S2・51 塚本政巳

題目も定まらずに何か書くということか、どんなにまとまりのななものか。そしてどんなに辛いことか。

これから先、どんな方向に書き進んでいくかわからなければ、まず書きはじめとして自己紹介からはじめていこう。

名古屋生まれの名古屋育ち、純然たる名古屋っ子であるが、はたして名古屋っ子というのとはどんな風に定義し、僕もその条件にあっていいるのか？ とにかく、名古屋から外へ出て生活をした事はない。もっど地域をせばめれば、まさに名古屋城のおひざ元で生活しているといえる。このような下地があるから何の煩しさもなく趣味として城の研究をはじめたと言えなれてもない。

ほんとうは別のところにもっと大きな要因があると思いたいのだが。

小学校・中学校・高校と何れもさしてありもなく、進んでこまできたのだが、小学校・中学校に於いて話をしてもおもしろくなり、したくもない。それは当時あまりにもいくじなし消極的すぎるということであって、何をやっても満足はいくものはない。しかし、満足させるものもなかった。

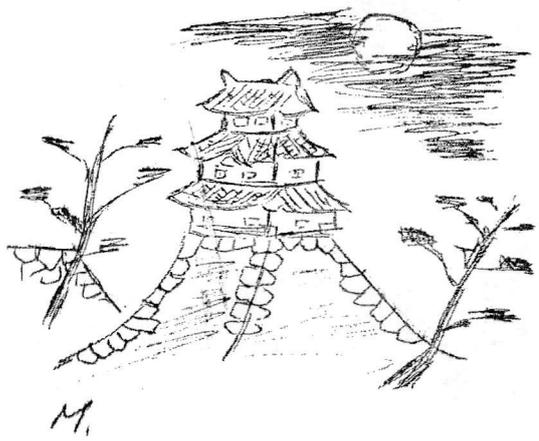
しかしそれも高校時代にはがらりとかわった。それまでの年間の学校生活ではまわりからの諸々の重圧に抗することができず、ただ周囲のなりゆきに身をまかせることしかできなかった。一個の人間が、まさに自由奔放とも言うほど自分自身にまかせて動くことができたのである。その良き高校とは愛知県立熱田高校。別に人にいい学校だと言いつるまつ事はしない。ただ、この僕は敬意を払う。

だから、高校時代のなつかしい思い出は

多い。話しもしてみたい。ワフブのおもしろさを知ったのもその一つである。苦しい事の方が多かつたかもしれないが、それもあとになってみれば楽しい思い出だ。思い、考え、批判されながらも僕ほうれしかつた。不完全さばかりの人間か、そういうことによって一つ一つ穴埋めされていくように感じられたから。

さらに城に興味を持つようになったのも一つとしてつけ加えられる。目と鼻の先にあるお城に行つたのは何年ぶりのことだつたか。その時妙に石垣の曲つた城門にひかれ、こんなものもあるものかと思つていたが、あとでそれが「杵形」と知るや、何か大発見をしたよつうで気持ち良かった。繞りてすぐに修学旅行で姫路城の雄大さを眼前にみせられ、城の研究を決定づけられた。すめば都ということはもある。それからは、登下校の途中にみえる天守閣の表情をながめるのがうれしかつた。それは今でもつづいてる。

二のようにして自分でも不思議なくらいに変わった。この大学に進み、「郷土研究会」の名前を聞き、何のためういもなく入会したのも何かそ二に共感を感じさせられるものかあつたのだろう。入つて良かったと思つた。書いていることが、何かきまつ、ほく聞えることは僕にもわかるが、冗談半分では書いてほいけな事だと思つた。ここに至つてはじめて題目を求めた。ここに至つてはじめて題目を求めた。ここに至つて改めて題目をながめてほしい。



山の辺の道によせて

し・11 伊藤明徳

人はなぜ過ぎ去ったいにしえに、こうばをたれきるのであろうか。旅愁を聞いては、とりとちもない涙を流し、ふるさとを口ずさんでは、底はかかない悲しみをおぼえる。いにしえにふけることほど感傷的なことかほかにあるだろうか。

私は現在の自分かほとんど幼児と変わりのないのを感じる。木枯れか吹きすさぶ通りに、一人佇むとき、幼児の姿が自分であるかのような錯覚を感じる。その時、幼児の思いおもをきっている自分を見出す。その思いおもは、時のませた夕の子に幼児の性感をおぼえたこととか、運動場の真中で小便をしたとか、ゆこと喧嘩してひっかかれたことではない。それは誰をもおそれることなく前進するあの生命力、又蟻にも神秘的な

ものを長出するあの繊細な感覚を感じたことである。私はそのことが極度に抽象化された形態で山の辺の道に見出すことができた。

山の辺の道は大和平野の東側の山麓を三輪あたりから北に向って奈良まで通じている古い道である。この道は大神氏、秦氏、物部氏等大豪族の間、交通の必要上から作られたものらしい。この道をめぐって神社、寺、古墳がいにしえを彷彿させるに十分な風物誌を展開していた。それらの風物は、各年代に大きな開きがあるにもかかわらず、この大和の特殊な雰囲気の中で、同一のまっぼにとけこんでいた。この融け合っているのだがあまりかもし出す風情こそ山の辺の道たらしめているものであると思つた。

三輪あたりには金屋の部落がある。この部落あたりから山の辺の道は始まっている。この部落の東南のふもとには金屋の石仏がまっつな夜屋に安置されていた。部落は日

本で最も古く市の一つとリわれれている海拓
榴（ほ）市（いち）のあつた川と推定されている。今で
は狭い路地を挟んで家々がひしめき合っ
ていた。

二の部落を切り抜けると三輪山が、円錐
形の美しい容姿をもって青空を背に、くっ
きりと浮び上がっていた。そのふちには
三輪山を御神として迎ぐ大神（おみかみ）神
社の拝殿が青々とした杉の木立にとり囲ま
れて、静かに佇んでいた。このやしろは
本殿がなく、これを御神体として崇めるとい
う宗教としては、より古い形態を備えてい
た。本殿よりある三輪山は、何の神神しい
ものにとりまわっているか、ように、どつ
しりと腰をすえていた。この神さまは、大
国主命であり、その信仰の容は、西光繁盛
病氣治療、縁結が、学業成績、かう、はて
は、へその穴のごみは、いまで多種多様で
あるという。人間に強いものと弱いもの
とがある。前者は、人間の力を信じ、不可能

を信じない。またそれを成しとげるだけの
力を備えている。後者は利己的で、かうい
はりやで、それでいて臆病で気が小さい。
私は宗教というものが存在する必要がある
とするならば、この弱い者にこそ、あてが
われべきものと思う。拝殿には巫女がい
た。白とうす緑のコントラストの服装のよ
く似合う二十歳ばかりのうつつ若き女性であ
った。白いはだ、うぐいすのような口元、
うるんだ目、どこを取り出して来しめてク
レオパトラに劣るまいと思われた。が実は
美しいどころではなかった。私はどうも純
心でこまる。女性をみるとだれもかれも、
神秘的にみえるのである。「大国主命よ、ど
うか、女性を手玉のようにあつかう二ツク
ツクを授け給え。」
神社を横切り、古い町並を通り抜けると
果樹園が開けてきた。ここに入るころにな
ると左手に小山が見えてきた。もちろん古
墳である。その背景に身成山と畝傍山、さ

らに歩くとふと目の前の小川のふちに、地蔵が三輪山を背景に一人ぼつぬんと行ずんでいた。このあたりは山の辺の道なうではの風情をかもし出していった。

穴師という部落を通り抜けると、景行天皇と崇神天皇の巨大な前方後円墳とその陪塚がひしめき合っているのに出会った。中でも崇神天皇が古代史において数々の論争をまきおこしている人物だけあって、その塚へ巨大さだけでなく、深い青緑色のほりにかこまれて、こんもりと木々の繁っている彼の陵の姿は、山の辺の道の中では、最も景色の美しい所であった。その東側に接する古墳は、ほりにたとえようもない清楚な雰囲気をもたよわせていた。ほりのふちの枯れたすすぎが、墳土にはえている青々とした木々にくっきりと映えていた。その色合いの複雑さにただみとれるばかりだった。これらの古墳の下にうすくまっっている生命力のあるわだかまりは幼児の姿をほう

ふつさせるものだった。ここにもある不可思議な生命力が存在したのだ。すべてがただぼんやりとうすくまっっているかのようだった。ここには時の流れは存在しないのだ。

このような古墳群の間をぬっていくと、うらぶれた山門に出た。哀愁を誘うこの寺は長岳寺だ。長岳寺は地蔵の寺と呼ぶのにふさわしい寺であった。門前に境内に至る所に数多くの地蔵が行ずんでいた。奈良の寺が支配者の寺ならばこの寺は民衆の寺である。閑散とした家々を前にひかえたこの寺は、暖い手をさしのべるかのように、私をむかえ入れてくれた。境内には、枯葉が表面をおおっている池があった。その池からはすの花かとび出していった。私ほけがれを追いかうがごとく、カいっばい鐘をついた。その響きは、余音を残して、腹の底までしみいった。その感触はあまいささやかなにも似たものがあつた。春ののどやかな日ざしが、はすの花に吸いこまれていた。そ

れとは向い側に桜の花が咲きみだれていた。どこからとなく、ひばりのさえずる声か耳に入ってきた。私はこの雰囲気にしたたりながら、とめどもなくたおまれていた。

ふと一人の農夫に気が付いた。彼の深いきざまれたほおから、一本のひげがどび出していた。彼は全ての地蔵に米を一粒一粒供えていた。私はいつも寺の内にこそ、合理的精神の具現を見出す。もし極楽があるとしたら、彼こそその任人としてふさわしりにちがいない。堂の中には地獄の世界を展開している絵があった。それは古ぼけて虫にひどく蝕まれていたが、色彩は強烈であり、あまりの恐ろしさに笑ってしまった。拷問とするものも、されるものも、笑っていた。

長岳寺かつ石上神宮までの道は田畑ばかりの単調な風景が続いた。それでも時たま姿をみせる高塚は少しでもその単調さをやわらげてくれた。私はこの畦道をただ黙々

と歩いた。遠くでは電車の走る音がした。快よい疲労感が全身にしみ渡っているのに気が付いた。……。そうすううちに次第に春の空が頭上に重くのしかかってくる。疲れてきた。私は五感がまひしたのを感じた。自分が信じられなくなった。現に歩いているこの動作を前にも経験をもっている。いや経験どころか、そのくりかえしが私自身である。突然大きな声を出してみた。それでも自分を確かめることが出来なかった。私は無数に分れてしまった。それがまた私でもあった。そもそも人は現代と過去と未来とを区分しているが、現代とか未来とかいうものは、過去の偉大さに比べたらどれだけの価値があろうか。人がいかにこれに其感を覚えるのはこれがためではないだろうか。古代人の生活にしたりすること出来るのも、このことゆえではないだろうか。私は、この時代錯誤の感覚こそいにしへと導くきずなとなっていると思う。

石上神宮にあと一里足らずの道のりにさしかかるころになると急に山陰に入る。廢寺の跡が今では雜草の下にうずくまっていた。それを過ぎると、急に暗くなり、目もさめるような緑の美しい色の配合をみせている池が、目の前にとび込んできた。童話に出てくるような妖しげな池だった。淵から水面につき入っている小杉の回りに群を成しているこいの背の赤色が、その神秘的な池をいよいよ引き立たせていた。今までの疲労感ほうそのようになくなっていた。この池をすぎると、杉木立に囲まれた石上神宮に出た。由緒あるこの神社はすぐ眼前にひかえている天理教本山に比べて、落ち着いた零閑気をただよわせていた。時代の流れのすべてが、この社に生々とした感じをいだかせた。

この社より奈良までは、はつきりとした道はない。ただセメートル前後の等高線道をたどっているらしい。次の歌は、それ

の根拠となつてゐるが、その歌の中で奈良まで行つてみた。

石の上 布留を過ぎて 二も枕 高橋過
ぎ 物さばに 大宅過ぎ ぼるひの 春日
を過ぎ 妻龍る 小信保おさほを過ぎ 王
笥まじには 飯さえ盛り 王鑑まじには
水こそ盛り 近きそばち行くも 影媛あわれ
れ (日本書紀)

山の辺の道のよさは古墳があるからではない。寺社があるからでもない。それは過去という全ての生命力の源泉となつてゐるわけだかまりの躍動にある。その躍動が静寂な零閑気におさええられてゐるその切迫感がこの道の独自の風情をかもし出してゐると思つた。

今振り返つてみると神秘の世界への窓をかいまみた様な気がする。しかしその不可解は依然元の状態のままである。その世界は理論ではわり切れなれぬ。それが私を支配

しているのだ。全ての行動を判断を未定ず
けているのだ。それを要するのには不可能で
ある。そこに幼児のときに感じたあの生命
力を見出したのだ。

過ぎ去ったあまたの出来事は、すべて融
け合いながら、心底深くにまどろんでい
るのだ。いそがしい仕事の合間ふと首を
かたむけてみるとよい。その私私とした状
態の内に見え、君自身も、君が見出すであ
らう。

(四十三・四・四)



この一年をふりかえって

S・S・32 寺本忠司

大学に入ってからもう一年が過ぎた。思
えば短い自由なときが流れた。その自由と
は何であつたらうか。勉強が、目に見えな
い力によつて強制されていたのでどう感じ
るのだろうか。まあ、受験戦争にはふれな
いで、この一年間の生活をふりかえつてみ
よう。

まず、学習においては、強制力を感じな
いゆえにあまりにも学校の勉強がおろそ
かになつたかもしれないが、さつきいった
自由な時間が多くあつた。その自由な時間
は充実した時間ではなかつたが、高校生活
とはちがつた時間であつた。一年の前半は
高校生活の延長と受験の影響で何となく終
わつたが、後半は自分の時間ももてるよう
になつたので、読書することができよう
になつた。この読書することがこの一年の

大きな業績の一つであつた。始めは概説程度
の化学書とくに科学史、科学一般につい
てどこに中津守吉郎氏の「科学の方法」科学
と社会には感銘が深い。思想に関する本！
……。一般に概説書ばかり読んだ。読
んだといつても、読んだ本の数は少ないが
反省としては、本を読み出すと、授業の予
習をする気がなくなつてしまふ。それは授
業に対する主体性が欠けているのに原因が
あるとは思つのであるが。……。

もう一つには、概説書ばかり読んでいたの
で、原書（ここであつてゐるのは古典）も
は名著を（こつ）を読んで見たいと思つてい
る。

また高校時代には本を読んだことがあまり
ないのでこの一年にたくさん読んだ気にな
る。他人と比較した場合には、あまり読ん
でいなければいられないが、自己の生活史に
おいては、読書に関するいきりは相対的に
充実した時代だと思ふ。

またワラフグにおいては、……。

はじめは、「マイペース」ということが、実感
としてあまりあつてこなかつた。観念的に
はわかるような気がするが、実践的にはよ
くあつたなかつた。付事においてもマイペ
ースでやれといわれても、あまりぴんとこ
なかつた。このワラフグにまつて、この一年
やつてきて、おぼろげながら「マイペース」と
いうことがあつたかすつわかつてきた。

この二年間をいふかえつて、ここに文章
をわけてみると、何だかこの一年間が充実
していったような気分になる。個別的に思ひ
出すとまずいことが多くなるが、全体的に
思ひ出すと何んだかよいような気になる。

歴史をいふかえつてみると、観念的に美化
あるいは善化する。この現在の状態を視る
と、美化よりもむしろ醜化する。だがつき
つめて考えていくと、歴史も美あるいは善
ばかりではなく、批判されるところをも
つ。そこに歴史を追究し、現在の生活に結

がつけて考えていく必要があるのではない
か。また、そこに歴史の意義・存在価値が
あるのではないか。

2年生の出身校志望学部志望科

伊藤明徳	旭文名教春文四工向理熱農川農	丘屋学井学市学陽学田学谷学	高部高部高部高部高部高部高部	考古学専攻 心理学専攻 理学科 化学科 農芸化学科 農芸学
西川 芥				
高橋 敏明				
井村 正博				
寺本 忠司				
塚本 政巳				
杉浦 秀敏				

山陰旅行記

S2・15 井村正博

去年は四月に提出のところ十月に出したので今年もそのぐらんにしようかと思っただか真面目に五月中に提出します。こんなのを書くのは嫌だし、書いたあとでいつも気まずい思いをするが、ほぼ強制的であるので割合に記憶に新しい山陰の旅行にいった時のことを書きたいと思います。

二月二十五日(日) 南京袋のようなザックとモヤラパンそして綿パン・ダスターコートといっいでたちで午後十時ごろに家を出て、名古屋には、十一時半ごろに着いた。汽車は二時十九分発であったので約三時間名古屋駅で待った。十二時ごろ待ち合の室が閉じたのでそこいらにおころがっていた。労務者風の人々が酒を飲んで十五・六人寝

ていた。三時間はとても長く感ぜられた。やがて汽車が来た。汽車は指定席になっていたが、あいにく私は指定券は持っていないかったが乗ることができた。乗ってから半時間程ぬむらぬむかつたが、気がついた時には京都をすぎた後部という所だった。二時間程ぬむつていたのであった。まづ目がさめて驚いた。それは外が真白、名古屋を出るときには星がでていてよい天気であったのに、雪が一面積っていた。約五十センチ程であろうか。ことができないので、しかたがないので外の景色をながめていた。そのうちに福知山、豊岡と通り過ぎ八時半ごろ鳥取に着いた。鳥取で砂丘を見るつもりであったので急いでバスに乗り砂丘口へ着いた。彼の音がゴーゴーとなって砂丘は雪が積っていた。ただ海はトモモ美しかった。約一時間半程歩いて一応一回したが大したことはないと思った。というのは近くに、天ヶ須賀（私の近くに住んでおられる

方は御存じだと思います。）の砂浜の水がひいた時の五倍大きくとも十倍にうならぬいぐらいいであったからです。それから昼メシを近くのレストランで食べた。砂丘の近くには、このようなレストラン。店屋等がどん／＼建ちあが、裏におもしろ／＼な所はなかった。それから午後二時に鳥取駅を出て西へ進んだ。汽車の中で女子大生らしき人に一人むかい合せにすわった。顔は「10までの位のうさぎ／＼の」と思ふへただし10がいちばんよい。私はいろ／＼話をもちかけてべら／＼しゃべった。その女は、土井の人で鳥取の大学に通っているということがわかった。当然私はおしゃべりであるので思いつくままべら／＼しゃべった。その人は上着でありたが私は又西進した。そして四時ころに米子に着き、クラスの友人に電話をかけた。今、おまえに作っているとのこと、聞かなく、友が来て、いっしょに米子の町を歩いた。へおとてわか

だったのであるが、山陰の町というのは、ピル（何階建かの）はなく、せいぜい二階の店が道の両ワキでアーケードをつくり、ズラツと並んでいるのである。この水はほぼ共通している。友の話では自分の家は、部落でみすぼらしいとのことであつたが、行つたら、豪華な白壁の門から大分入つていつて玄間があり、十二とか十六じょうの室がいくつかあつてびつくりした。二十六日の夜は、厚いもてなしを受け友の家に泊り、次の日八時に友にみおくら丸ながら米子を出て又西進した。安来・宍作温泉をすぎ昼前に松江に着いた。まず城を見に出かけた。ここの城はすすけてきたなかつたが何か本当に城らしい感じがした。それから歩いて小泉八雲博物館、バスに乗り島根大学まで行つたが、何か学生は冷たさうな感じであつたので一人も話をすることなしに体育館のうらで友の母上につづていた。いた弁当をひろげて食べたが、まわり一面にはゆせ

ンチ程の雪のかきあつめがあつた。その後で町をぶらぶらしながら夕方まで街を歩つつきあるいていた。その夜はユースホステル（初めて泊つた。同室には高松三坪生が五人と私でした。石川某二名、伊勢二名、さい王某一名が、しゅう蔵前に最後の旅行を舉しもうといふのであろう。翌日、則ち二月二十八日には五時に起き一人でY・Hを出て松江駅まで二十分程歩いて行つた。松江の町は、静かで昔風の家も多少残つていておちついた感じの町であつた。松江から再び米子へもどり米子より境港行に乗りかえ、境港に着いた時は隠岐の島行の船が岸ぺきをばな丸ようとしているところだつたので、あわててとびのつた。四日市に比べれば問題に存らぬ。桂海は美しかった。海軍風が強く船は鏡の上をすべるようであつた。船上でいぼら木某の高三の人といつしまになつた。彼も一人旅であつた。好感の持てる奴であつた。彼は途中の島で降りたが私

は終桌の西郷まで約八時間船に乗っていた。やっと隠岐の島へ着いた。旅行者は私以外に一人大阪で働いている私と同じ年の青年であった。バスが二時間に一本程度でいっしょに途中まで行ったが私は後醍醐天皇の御墓を見るために降りたが彼は、水若酢 Y・H へ行つた。私の今日泊る Y・H は隠岐島 Y・H というところで、再びバスに乗ったが一時間以上乗っていてもいっこうに目的地につかず約二時間してからバスをおりた。その時には、外は真暗で Y・H までの百メートル程の道のりは全く、こわいというか淋しいというか情ない程であったが Y・H のあかりが見えた時にはほつとした。Y・H はヘアレントとその奥さんの二人で 60 人収容できる Y・H に泊り客は私一人で、もてなしはすごくよかつた。これも後でわかつたことであるが、汽車の中で他の人にも聞いたが、私が思うに隠岐の島の人には日本で一番情が深いのではないかと、そ

の日はぬくぬくと、ぐっすりぬむつた。その Y・H のらくがき帳によれば一月目前に南山大の Y・H・C が来たらしい。二月二十八日、海を見に出かけた。海はとても美しい（ととてもという字をつけても決してはずかしくない）と思われれる程美しいのである。私が四日市に住んでいるせいなのである。うか、私達の海も昔（伊勢湾台風前）にはすぎとおつて海のそこが見えていたがそ水以上にすぎとおつているのであるこの海は、Y・H のある村は総戸数三十程で主に漁業でくらしを立てているらしかつた。……私の旅行は十日間で以上書いたのは三日目の昼ごろまでで、まだいろ／＼おもしろかつたことがあつて書いていると今書いた四倍程書かぬばならないし、くだらぬことを長々書くと編集委員も迷わくするからこゝで終る。

N氏からの手紙

L2-14 西川 洋

拝啓

〇君あこがれの大学に入学し、又郷研なるサークルに入ったそうぞ。先づはお目度とらう。君も大学生として、又社会に生きる人間としてこの4年間を有意義に送つてほしい。難しい事じやない。要するに毎日毎日マーシヤン・パチンゴ・デート……その他もろもろの遊ばに明け暮れていてはあかんデエー。ソリヤ仲には遊んでばかりいても試験の前日に死になつて勉強す水はなんとか単位はとるけれど、だけど君は単位をとる為に大学に入って講義を受けているのと違うだろう。広く、いろんな知識を身につけて、自分に合った物を見つけて出す為に入つたのじやないかネエー。わかつたかい。マスコミに登場する大学生へここで

は三流全学連を想像しちやいかん。彼らは大学生ではないんだ。急学生だ!! (注これをむりしてダイかくセイと読んでチヨウダイ) 彼らは学生の本分を忘れてしまつて町の暴力団とちつとも変りのない事をして喜こんでいる。まったくタワケなやつらだ。君もそう思うだろう。彼らはそんな事をしていてもちつとも恥かしいと思つていないどころか何か英雄気どりしていばつていやる。君の大学ではそうはいかんぞ。そんな事をしては留年か、最悪の場合は退学も覚悟しなきゃいかんデエー。歌の文句じやないけれど、大学というところは、そんなに甘いところやおまへんにやー、ちつとまじめにやれー。と、言つて罵倒されるゾオー。それからナイア、オマエ、オレも昨年は大いに悩んだがいわゆる「五月病」又の名を「五月危機」というのを知つてゐるか？君の今の状態を言つてゐるのだ。要するに入学した安心感から勉強へのファイトを失

って無気力になり、何もしないでダラダラ
過ごす。まァーこれは今のオレでも少しは
当てはまるかもしれないアァー。まァーあ
んまり気にすんな。大学祭が済むころまで
にはすっきりして気が落ちついてやる気が
出てくる。まして大学祭でかわいい女の子
を見つけてうまく射止めたいです。まァー
イトが出てくるぞ。まァーしっかりやれよ。
最後になってしまったが、重要なことだが
、クラブ活動とサークル活動についてだが
、一年のうちに、がっちりクラブをかため
ておかんと、二年になって分裂するぞ。だ
からコンパ・合宿・話し合いなんでも積極
的に参加しろよ。それからサークルだが、
聞くところによると郷研というサークルは
先輩が親切で人が良いと聞いている(影の
手、うそつけ!!)まァー早くクラブにうちと
けて好きな事を思う存分やることだね。つ
まらぬ事はかり書いたが、少しは参考にな
るだろう。又会う日まで、
AN REVOIR

熊沢家について

しえ・14 西川芳

もう二年ほど前になると思うが、新聞の
片すみに、熊沢天皇死すの記事があつて、た
のめ覚えてゐるが、この熊沢天皇の出身地
が今、私の住んでいる尾張一宮の北東に在
置する時之島であるという因縁からであろ
うか、興味があつたので少し調べた事を発
表したいと思う。
熊沢天皇といつても大部分の人はあまり知
らないようだ。ひどい人になるとプロ野球
の名選手じゃないか?。(これはプロ野球金
田の事を金田天皇ということからの推測で
あろう)などと平気な顔でいつてゐるが、
実は熊沢天皇というのは熊沢寛道氏のこと
で、戦後「私か南朝か何代目の天皇だ」とい
つて一躍有名になつた。文献によると尾張
一宮時之島の熊沢家は後鳥山天皇の自孫尊

美人と天下

S 2・53

杉浦秀敏

戦国後期から江戸初期までの移り変りを表わした言葉に「信長が餅をつき、秀吉があんを入れまるめ、それを家康がおもむろに食べた。」という言葉があるが、これを少しもじってみると、戦国の立て役者たちである信長・秀吉・家康の三人が一緒に歩いておった。その時、向うから年は20才前後、鼻筋通って、目はパチリ、口もどちよと愛らしく、クレオパトラか楊貴妃かというようなポインポインの絶世の美人が歩いてくる。そこでまず信長が彼女に近づき、「お茶でもどうですか」と話しかけた。そしてなんとか彼女を喫茶店にさそうことに成功した。そしてお茶でも飲んでゆっくり話をしようと思っっているところに、前々から付き合っていた女が現われ、有無を言わせず信長を連れていってしまった。これ

を見ていた秀吉は、いいチャンスだと喜び、信長の代りとして彼女に話しかけた。そして巧みな話し方で彼女の気持を彼に向けることに成功した。そして一度は彼女を自分の恋人にすることが出来たが、なにぶん秀吉は欲が深くあらゆる物を自分のものにしたいと思ひ、それゆえ非常なけちであつた。それに、彼は彼女という美人な恋人がありながら他の女にも手を出していった。それがついに彼女に見つかつてしまひ、「さよなら」となつてしまつた。この様子を見ていたのが、家康であるが、彼は今まで友人のやることをだまっただけではあるが、決して女には無関心なわけではなく、むしろ美人の彼女を好きで好きでたまらなかつたのである。だが今までは自分は友人にくらべて少し劣っているところがあると、思ひ、友人にゆずつていただけのことであり、ライバルの二人の友人が退りぞいた今は、どんなことをしてでも彼女を自分のも

東照公遺訓



のにしたいたいと思ひ色々と手をうつた。しかしここにおいてライバルが現れたのである。そこで家康は、今度はどんなことをしてでもライバルを倒そうと考えた。そして家康はライバルを悪者にして、その悪者を彼が倒すことによつて彼女を獲得しようと考えつゝいた。そしてあるわなを考えた。それは、ライバルが彼女を好きなのは彼女が目的ではなく、実は彼女の財産が目的であると言ひふうした。それを聞いたライバルは恐つて家康に決闘を要求した。しかし家康はその決闘ではいかんなくたぬまぶりをはつきしライバルに勝つた。そして彼女をもものにしたのである。



人の一生は重荷を負つて遠き道を行くが如し。急ぐべからず。不自由を常と思へば不足なく心に望みおこらば困窮したる時を思ひ出すべし。堪忍は無事長久の基、怒は敵と思へ。勝つ事はかりを知つて負くる事を知らざれば害その身に至る。おのれを責めて人を責めるな。及ばざるは過ぎたるより優れり。

北海道旅日記

工學部三年 梶浦博一

この旅行は去年の八月に行つたものである。今更古い事を書く必要もないのだが、他に何も思ひつかないのでやむを得ない。そもそも言い出したのは我輩である。頭初四人であつたのが、色々研究していろいろうちにワンドルの連中を仲間に加える必要が生じ、一人強引に入れた。もう一人さうさうしく入つて来た。全部で六人である。この連中が誰であるかは個人の名譽を著しく傷つける恐れが度々生じてくるので伏せておく。何度か討画立案会議を開いた。そのつど徹夜であつたが、實際案を練るのは二三時間であとは竹林の中で鳥が何となくか研究していた。先輩を呼んで来て話を聞いた。少々大げさに言つてはいるものの、経歴者

の話は聞くべきものである。裝備に困つた。先輩の話を聞くにつれ、湖では永ける、海ではフリがでる、では持つてゆこう。とにかく安く行こうというので、すべてキヤンプで行くことになつた。炊事道具一式各種調味料、腐らないものはこちらで用意し、野菜と肉類だけ現地購入とした。一人二十キロ前後になつた。酒を持つてゆくことを提案したが、強力な反対者の出現に合つた。しかし着毒薬ということでは解決した。このことは後になつて非常に都合がよかつた。銚子中野でリハーサルを行なつて八月一日に出発した。上野駅に着くと、青森行の列車はすでにホームに入つていた。大きなミスである。客は我々と同様ヘンテコな格好の連中ばかり、坐るところもなし。唯一残された場所といへば想像だけをださう。そうです。洗面所附近の一角である。やむえずそのへんにリュックを積み上げ、シートを広げてすわりこんだ。とヒか

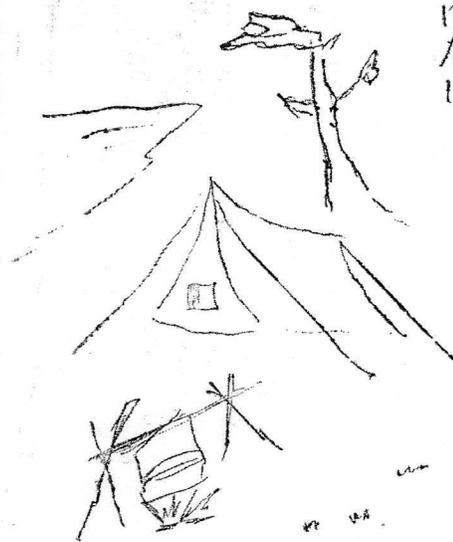
く悪臭が鼻をつく。しかし、おどろくニヒ
ト人間の慣れとは恐ろしい。二三時間もす
ると何も感じなくなり、ニニが何んとは
らしいのだらうかと思ふようになる。ニニ承知
の如くそニには生活必需品がどうつてい
る。列車には十時間以上お世話になるので
ある。水は豊富にあるしドアに近しい。駅の
ソバ屋にすぐかけこめる。何と云つてもト
イレに近しい。車両の真中にいると想像して
ください。たどり着くとは十人は要すると思
はれる。夜行であるから皆眠っている。通
路一杯にとにかく一苦中する。それに夜行
列車ではイスの通路に寝たけうが禁であ
る。我楽園地、すばらしきかな。とニニが
仙台で我楽園地も縮ませざるを得なかつた。
新しき客が入つて来にのである。その中に
女性が一入した。其箇の夜過と僕に我々は
人生の空しさを感じ、うう若き美少女で
あった人も、ニニも時の流れとともにお
うずうしくなるのかと。彼女は我々の聖地

に侵入し、我々の生活のすべてであるリュ
ックの前にくると、何んかちゆうちよもな
くその上に腰かけた。その中には生命をつ
なぐためのすべがえつていたのである。あ
あ、かなしいかな。そのすべがどうなつた
か書くまでもない。十べとそれ下の野菜。
ソーサーの運命を心配するあまりとうと
う眠れなかつた。青森から船に乗り換え、
函館で札幌行ききの列車に乗る。そこで女性
の多いのに初めて気づいた。北海道におけ
るジャガイモの消費量が七月八月に異常に
増加するといつのもこの原因があると思
われる。話にかけてみれば十人に二三人
は名古屋近辺の女の子に当る。あるグルー
プと仲良くなつたが途中で別れた。彼女達
とは東京行ききの汽車で再会するか、我々は
洞爺近辺を歩き、景色と女性を半々に見な
から北海道の雄大さに感嘆した。旭川の友
人宅に一泊して大雪山に登った。その日は
朝から雨が降つていた。そこで登るか、断

念するか、意見が分れた。馱り赤帽さんに肩動さして登ることにした。ひどい道でぬかるみが続いた。食料品を一週間分買ったので一人二十五キロ前後になっていた。登り始めたのが一時、目的は姿見池、頂上、下三百メートルの所である。雨にぬれながら登った。一人がバテてしまい、リュックを交換したり、荷を積み換えたりして、やっと池に着いたのが五時、あたりはうす暗く、霧のため視界三、四メートル、温度は五度、六度、ものすごく寒い。夢中でテントを張って、その中でラジースをといた。着るものはすべて着た。これから食事の用意である。水は池の水しかなり、そこで米を洗ひ、野菜を洗った。とニろがよくよく見るとミジンコに似たものとか、水生昆虫が泳ぎまわり、イオウ臭があった。物は煮えようで、これ等がまんげく質とカルシウム源となり、遊離のイオウによる酸化還元漂白効果を考え合せれば、何の抵抗も感じ

ない。できあがった料理はテントの中がうす暗くてよく見えなかつたのがさりわりであった。ウイスキーを飲んで腹の調子を整え、明日の晴天を祈って寝たが、翌朝やはり小雨であった。ラジオで台風接近を聞き下山することにした。とニろが途中中腹に来た時と天気回復晴天になった。まったくついでになかった。

以下様々な事件に遭遇し、かつまき起しながら旅をつづけた。そこでその一を終めるが、その二に付いては今のとニろさらさら書之気はない。



朝鮮大学を訪問して

経済学部三年 西川義永

去る四月十八日、東京都の美濃部都知事は朝鮮大学を認可し、一先自民党・政府は外国人学校制度を国会で何んとしても通過させようとしている。このような獨の中にある朝鮮大学を60数名の名大生と共に私が訪問したのは昨年の五月だった。朝鮮大学は東京都小平市にあり、園にはまだ武蔵野のおもかげが残っている。工學部まであり4年制である。学生自らが作り上げた講堂や階段が少しゆがんでいる。寄宿舎、図書館、小人数単位の教室、授業は午後三時まで、土曜日の午後は全員がスポーツをせしめ、どこからともなく羨しいハリモニード聞えてくる。

朝大生は日本語を話せるし、むしろ私達名大生とは日本語で話しあうが、朝大生相互の間では朝鮮語を使う。朝鮮人学校における民族教育とは、(一)母国語(朝鮮語)を話し、(二)祖國の歴史を正しく知る、(三)祖國の地理・文化を学ぶ、ことである。この民族教育が何故反日教育とされるのか。朝鮮人が朝鮮人としての誇りを持ち、主体性を確立して祖國朝鮮の統一と建設につくす為の教育。歴史の時間に世界最初の天文台をつくったのも、金属活字をつくったのも朝鮮人であったということにならう。……このような事を聞いたり学んだりにつれ、わたしは自分が朝鮮民族であった。たどらうことをほりにらにおもうようになった。(青木新書「民族教育」p.139) それに比べ、日本の学校へかよっているある女子中学生は「私がいくら日本人らしくふるまっても、噂したときなどへ朝鮮人、朝鮮人」といわれる。このときが一番腹がたった。そんなとき涙をなげすまいと歯をくりしびた

が近いてしまった。(同P106)と書いている。

朝大生と話し合う中で、彼らの祖国の統一と再建にもえる強い意志に心を打たれた。そして多くの朝大生は卒業後も日本に残り在日朝鮮人子弟の教育にたずさわっている。時にはそんな朝大生をうつやましにも思った。でも私達日本人にも我達なりにやるべきことがあるのではなからうか。すぐ隣にありながら、すぐく遠く感じられ、私達の余りよく知らない朝鮮。朝大生の一人は、朝鮮の歴史は侵略者との闘いの歴史であり、それを学ぶことによつて祖国を愛することができると言っていた。私達は朝鮮を知り朝鮮の歴史を学ぶとともに、いつの日か明治百年、日本の歴史をもう一歩ふりかえる必要がある。私も含めて多くの日本人の内にある朝鮮人愛護観・アジア愛護観のがじんな結果をもちたらし、もたらしてつあるのをも考えるなくてはならぬと思う。

3・4 年生出身校・学部・学科・専攻

津坂 峯隆	明和 工学部 4年	鉄鋼学科
樋口 清司	四日市 工学部 4年	数学科
山岸 章	泉丘 工学部 (石川県) 4年	
梶浦 博一	四日市 工学部 3年	応用化学科
西川 義永	東海 工学部 3年	

自己紹介にかえて

経済学部3年 西川義永

私は宮沢賢治の作品が好きだ。小学校の教室のラジオで聞いた「銀河鉄道の夜」の深い印象は今だに忘れ得ない。卒業文集に「宮沢賢治のような人になりたい」と私は書いた。教科書で宮沢賢治の伝記を詠み何んとなくそう思ったからだ。それ以降彼の色々な作品を読んだ。でもまだ自分の読んでない作品——「鳥と北斗七星」——があるのを、東大戦歿学生の守記「はるかなる山河に」という書物で知った。佐々木八郎さんへ大正十一年三月七日生、昭和十七年四月東大経済学部に入學、昭和二十一年四月十四日沖繩海上で昭和特攻隊員として戦死は自己の気持をこの「鳥と北斗七星」という作品で表わしている。明日は戦死するのだ。と思うながら、私は、この戦に勝つことがいいのか、山鳥の勝つ方がいいのか、

か、それは私にはわかりません。みんなあなたのお考え通りです。と祈る大尉、そして後に山鳥を葬りながら、あああまぢエル様、どうか憎むことの出来ない敵を殺さないでいいように早くこの世界がなりますように、そのためならば、わたくしの中からなどは何べん引裂かれてもかまいません。というところ。「世界が正しく、良くなる為に、一つの石を積み重ねるのである。なるべく大きく、据りのいい石を、先人の積んだ塔の上に重ねたいものだ。」と思いながら、佐々木さんは死んでいった。正しい認識と行動へかりたてる勇気を、と同時に人に対する愛、自然万物に対する愛を自分は持ちたいと思う。宮沢賢治の作品と共に好きなロマン・ロランの作品にはこの勇気と愛がある。

『かべ』 — 短い話 —

理学部四年 樋口清司

「おやじ、一年留年させてくれないか。」

「ほかなことさ。単位でも足りないのか。」

「いや。成績は良い方だ。だがもう一度

やりなおして、考えたいんだ。」

島崎淳一はだんだん大きくなっていく自分の声にも気付かず、なんとか父を説得しようと思つた。しかし、ニコヨン労働を続ける父にそれは明かに、ムクムク行爲であった。父のたくましく日焼けした肉体と、白いもののまじりはじめた頭髪のアンバランスが、淳一の末意を鈍らせはしたが、彼は家を出てでも、留年するつもりであった。

父三太郎は戦前職業軍人であったが、戦後の混乱期、幾度かあった出世のチャンスも、そのあまりに潔白な人格ゆえあ

えて身を引き、日やとり労働者として平凡にその日その日を送っていた。しかしその名譽心と野性は、息子淳一に受けつがれていった。やっぱりだめか。どうしても留年するつもりだ。」そんないろいろのなら、一人で生活してみる。家を出てな。」

そういわれて淳一は複雑な気持ちであった。下宿生活はのぞくところだ。経済的にもバイトを少しふやして、奨学金でそう苦しくはない。金の苦節はさんざん経験してきたのだ。今は精神的な解放感と余裕と時間がほしいのだ。もう二十二年の淳一にとって、くすれりく価値感、はっきりにない人生観は無意味な存在であった。

留年して何をやるのだ。」

「いろいろあるさ。とにかくいままでの生活から抜け出したいんだ。ただ情性で生きて来たんだから。」

そんなこと留年しなくても出きる事だ。出来なければおまえが怠慢なんだ。それにけつ

しておまえは情性で二ニまできたんでない。
はっきりした目標をもってけるではなりの
か。」

淳一は苦笑した。父はおれが~~博士~~^{博士}が大臣
になることを希望してける。おれも中学・
高校とぞして今でも時々父に叩いてけるん
だ。「大学院へ叩いて学者になるよ。三十才
頃まで食わせてもらうよ。」「大学院だめな
ら何か一つでっかい事やってやるよ。」そ
んなことを思い出して苦笑せずにはいられな
かった。

淳一は小中学と町でも目を見張るような
秀才であった。中には、「淳ちゃんは大天才だ。
将来すごい事をするかもしれぬぞ。」という
人もいた。淳一もそれらの言葉を耳にして
いた。しかし他の秀才とちがって、ガむし
やうに勉強するでなく、友人との交際はき
わめて活発で、盛んに人生論などを語り、
予備校化する高校とクラスの雰囲気と交際
し、クラブではサッカーをやり、その中心

的存在であった。たし、隣近所の人たちと来し
て利口ぶつずに、かつ筋金入りの人格者と
して交わっていた。よく遊びよく学びと
して社会のため、国家のため一生をささげ
るのだとみじんの疑いも持たずに、二ニま
で来たのであった。「社会の爲にならなかつ
たら、何のために生きるのだ。」よく友に
問ひかけたものだった。二ニいう時、た
いていの友は「君はえらいよ。しかし俺は目
前の大学入試が心配だよ。実力がある君に
はわからんだろうか。」

そういわれて、喜びかつ満足していたの
だ。

「三んばんは。」と大きな声かけた。

父どの口論中、隣りのおばさんが入って来
た。しばらく用をすまして後、二ニにニレ
ながら、「三太郎さん、あんたこんな息子さ
んもって、本当にしあわせ者だねえ。淳ち
ゃんなら、どんなお嫁さんでも喜んで来る
し、リッぱなお人になるでしょう。ほんと

うにたのしみな事。」父はうれしそうに「いや、こまったやつで、大学なんか行くと変な理屈で親をこまらせるんですよ。」

「もう四年生におなりになったの。一流会社かひっぱりだこでしよう。お給料も多し、四年か五年もすれば、係長ぐういはね、淳ちゃんはまだだ。ほんとうに頭はいいし、世間の學識も、習慣もちゃんと、あきまえているし、……。」

おしゃべりは種き、父も満足そうに笑っている。

淳一はその言葉をきいて、なんとなく心がはずんでくるのを覚えた。そして留年する決意も、家を出ることも、父との口論も忘れて就職案内のページをめぐりはじめた。

五月に思う事

経済学部四年 山岸章

水たはす、一かり青葉となり、渡る風もさわやかな五月になりました。五月になるといよいよ就職シーズン到来という事になります。この就職にはいろいろの議論がありますが、ここでは仕事への意欲について述べてみたいと思います。

現代はマイホームの時代だとよく言われます。それにしても家族皆でピクニックやドライブに出かけるのを見る事は、いかにも幸福そうではないかと、思われます。しかしこれも他面から見ると、むしろ異なります。すなわち、仕事に情熱がもたず、意欲がなく、ただその時間だけ職場にいて家庭に帰ってから本当の生活に帰る様な仕事は、単に、その経済的基礎をたてさせるものという考えが、これらの人に支配的なのではないでしょうか。だが

らお金をためて車をかってドライブをするとか、家族で買物に出かけるとかに生きがいを見出してゐるのです。これではなんし悲しい事ではなないでしようか。人生の何分の一がも無駄に使つてゐる事になります。

そこでなぜその様に仕事に情熱を惹き出す持てないかと考えるに二段階に分類できると思ひます。その第一段階はまず正しい仕事観が存在してゐない事です。そして第二段階は、その第一段階を基礎として、その上になつて正しい仕事観があつてもしかし惹き出す持つ事が難かしい事象、すなわち能力の疎外が行なわれてゐる事だと思ひます。ですから仕事に情熱を掛つたには、この二段階を突破しなければならぬ事になります。まず第一段階の仕事感観についてですが、一般に現在社会に浸透してゐる仕事感は大きく二つに分けられると思ひます。一つは経済性です。はたして給与や賃金などのくらしいか。昇給等はどのくらしいか。この様

に経済性を考える事は本質的に労働の側面ですが、当然の事です。他方は社会的地位です。すなわち出世するかどうかという事です。この事にして考えると本当にはもう一つの事が欠けてゐるのです。すなわち共同体内における仕事の分化です。仕事のそれぞれは共同体によつて一つの物となつてゐるのです。この様に仕事感には社会的分業という視点が欠けてゐるのです。



次に第二段階の疎外についてです。これを大きく分けて二つの疎外が支配してゐると思ひます。その一つは経済性に関する事です。すなわち仕事量と給与や賃金が正確に反影されなかつたという事です。ですから一生懸命仕事をやるよりも、ほどほどにさえやればよいという事

になります。その二は共同体分業に関する
 ことです。すなわち現代においては原始社
 会の様に共同体分業が単純ではありませ
 ぬ様に発達し分化しているのです。た
 だ、この様に複雑な社会性が明確でない事
 が資本家の導入によってより複雑化する
 すなわち労働者にとっては、資本家の思
 っている事が明確ではないので、ですから
 それからも疎外感が出てきます。この様に
 して経済的疎外と社会的疎外により正しい
 仕事感が存在して、仕事に意欲が持てぬ
 事になるのです。

二の様にして二段階に渡って仕事に情熱
 が持てぬと意欲がないという事になるの
 です。そこで現実的にどうしたらよいか
 という事に進みます。正しい仕事を持つと
 いう事までは簡単でしょう。しかし次の段
 階の疎外となると難かしいと思ひます。ま
 ず経済的疎外ですが、これは当然の事とし
 て資本家と労働者の対立を生み出します。

ですがここには仮に能率給の様なものか
 両者の間で同意に達したとして述べる事
 を省略します。一番の問題点は結局社会
 的疎外をどの様にするかがという事です。



二は本質的に組織
 の問題を念めては
 んど解決が困難で
 す。ただ現
 実的方法と
 してそれ
 弱めるには

一方法として人格を持つ事が上げられま
 す。ここには人格とは自分の行動にある
 基準を置いて自分の行動を体系化するこ
 とです。これによって自分の人格に似た
 仕事を選ぶという事が一番だといふ事に
 なります。すなわちこれを簡単に言うに



ならば自分にあつた自分の好きな事を仕事にするという全く一般の結論になります。しかしそれでもそれだけを知つただけで錢々は何か視野がなくなつた様に處するではありませんか。外では希望に小鳥のさえずりが響いて、五月だなあと思ひせます。一終りりー

駅

工學部四年 津坂峯隆

暑い。駅の前の広場には動くものもない。花壇の縁も太陽から少しでも離れようと、グラリと垂れ下がつている。夏の強烈な陽は、この山に囲まれた、小さな田舎の駅にも容赦なく振り注ぐのである。人々は陽を遮ぐる屋根の下に迫いやつれて、ひっそりしている。たまに外に出ることがあつても不気嫌な顔を露わに、隠そうともしない。その引躍るような足音は、青空の中へ吸い込まれてしまつて、不思議なほど静かさを保つてゐる。突然、その物憂い白ちやけた静寂を破つて、汽車が到着した。毎日、同じ時刻にこの駅に着く、一騎当千の化物である機関車も、ここ数日來すっかり弱りきつてゐた。寒い日ならば勢いよくシュッシュッと、吹き出す白い煙を、その日も申し

分け程度に出しただけで駅を去って
いった。去った汽車が、駅前の広場
に送り出した客は少い。皆暑さから
逃れようと、糸に引かれてもしてい
るかの如く散っていった。或る者は
駅前、或いは、駅前のバスの行合所
に飛び込んだ。それらの客に取り残
されて、若い男がゆっくり出て来た。
建物を去た彼は、捜し物でもしてい
るように、顔をしかめて、モヨロキ
ヨロ見回した。この土地は始めてで
あった。ただ、広い広場に花壇、更
の向こうの鉄道に平行した道路、更
に向こうの、道に面して並ぶ大きな
きたない看板を立てた店の列を見て
どこ迄行っても駅前の景色は一緒だ
なと思ひながら、彼は左の隅に今の
汽車を待つていたら、バスと、地
図を掲げた待合所を見つけた。この
男は、この地方の有名な寺を訪れる
には、駅前からバスに乗ればよいこ

きを知っていた。だがどのバスに乗
ても寺へ着けるとは思っていなかった。
彼は都合のよいバスを聞こうと思つて
止まっているバスに近付いた。
バスの中に二、三人の乗客を認めて、
車掌の顔を眺めた彼は、そのままバ
スから降りて待合所の前まで歩を上げ
た。車掌の顔はあまりに整い過ぎてい
た。その整った顔に質問を突するの
が愚かしく思えたのである。否、気遅れ
を感じたのである。それでも待合所の
前で、もう一度考ふるように立ち停
てバスを振り取り、依然として横顔
を見せている車掌を見ると、待合室の中
をのぞいた。五人か、六人の客が、腰
掛けていたり、立っていたりして居る。
切符売場はなし。唯の待合室である。
丁度、そこへ子供を連れた女が、駅
の方へ通りかかった。あの、ちよつと
すみませぬが、安念寺へ行くには、あ
のバスに乗ればよいでしょうか。」と、
バスを指して聞いた。首をたれたまま

眠りこけていたため、せつかくの帽子が役に立たず、顔に傷が当って、五つくらいは男の子の手を引いて来た。女は、尋ねられて、いきなり悪中に偏平な顔を更に偏平にさせてニツと笑んだ。子供はいぶかしみに男の顔を覗いた。この女が路上で若い男に話しかけられるのは始めてである。何と言ったらいいかまごつてしまつた。第一、出し抜けに聞かれたので、質問の意味もよくわからなかつた。この人は、安念寺へバスが、どうとか、言っているが、あの寺は町のはずれじゃけ、歩いても十五分とかかりやせんのに、何故バスなのことを聞いたりするの、女の胸に去来したのはこれである。だから答えるも要領を得なくなる。「安念寺は山下という所で降るんじゃないか……」早口なので、聞きがまじつた小さな声で話すので、彼には、そのあと何

を言っているのか、こつぱり聞き取れなかつた。その時、急にエンジンを始動させ、バスが動き出した。あのバスが下を通るん……しかしながらバスはすでに、大きく広場を回って通りに出るころである。

とうやくのことでは、再び笑いを浮かべて去つた女と、停留所の時刻表から、寺の近くを通る次のバスが二十分後にそこを出るのを知つた。そして、不待要領の答えしか得られなかつたので、暑さやバスや女に腹を立てながら待合室の中へ入つた。前からいる客が、ジロジロ彼を眺めている。それらの視線に、気まずさを感じながらも奥へ進んだ彼は、思わず顔をゆがめた。空気が動かないのと、足根が薄いので外より暑つた。唯、直線路が当たらないだけ外よりましであつた。彼はその暑さの中で我慢強く待た。そして五分遅れを来たバスに乗り込んだ時には、窓のお寺を見終えたよきな木とした気分になつた。

名古屋大学郷土研究会

会則

第一条

本会は名古屋大学郷土研究会と称し、本部を部長宅に置く。

第二条

本会は、郷土の歴史・文化・風俗・地理等を体験的に研究し、会員相互の人間性向上を目的とする。

第三条

本会は、本会の目的達成のため次の活動を行う。

- 一、本会の目的にそつたテーマを決定し、次の様に研究を行う。
資料研究・現地研究・資料の整理と発行・その他
- 二、春・夏の合宿
- 三、機関誌の発行
- 四、他校並びに民間の団体との意見交換

第四条

本会は左記の会員をもって組織する。
会員とは、本学学生で本会の目的達成に賛同する者。
特別会員 本学を卒業し、在学中会員であった者、並びに本会の目的達成に賛同する者で総会で認められた者。

第五条

本会は次の役員を置く。

- 一、顧問 本学の教職員で本会の目的達成に助言を与える者。
- 一、部長 本会を総括し、本会を代表する。
- 一、副部长 部長を補佐し、部長に事ある時はこれを代行する。
- 一、渉外 本会を代表して渉外事務を取扱う。
- 一、会計 本会の会計一般を取扱い、名大祭後一週間以内に中間報告。

十一月三十日付の決算報告を義務とする。 会員より

会計報告を求められた場合も

同様に報告の義務を負う。

一、書記 本会の議事及び活動

に附帯する事務一般を記録、

あわせて管理する。

一、記録 研究調査の記録を取

扱う。 写真・拓本等を行

い、管理する。

一、編集 機関誌・資料集等を

発行する編集委員会の最高責

任者として、委員会の事務を

遂行する。 委員は総会に

よって互選される。

わ六条

役員は毎年十一月中に会員中か

ら選出する。 選出方法は総会

において無記名投票により決する。

但し、顧問は総会の推薦の受諾に

より決定とする。

わ七条

役員任期は原則として十二月一

日より翌年の十一月三十日までとす

る。

わ八条

任期中に役員の不信任が表明され

総会において三分の二の賛同を得た

場合は不信任が成立する。 二の

場合、その役員の役職についてのみ

わ六条に基づいて選出する。

わ九条

役員が辞意を表明し、総会で承認

された場合はわ六条に基づいて改選

する。

わ十条

総会は本会の最高議決機関である。

定例総会は、(毎週土曜日)の例会を

もってこれにあてる。

わ十一条

臨時総会は次の場合に開かれる。

一、全会員の三分の一の要請があつ

た場合。

一、役員の過半数が必要と認められた場合。
一、部長が必要と認められた場合。

才十二条

総会は全員の過半数の出席をもつて成立する。但し、会員が正当なる理由で出席する場合は委任状をもつて出席とする。

才十六条

特別会費を徴収する場合は、総会で承認されねばならない。

才十三条

総会では過半数をもつて議決とするが、才八条・才十八条・才十九条は除外する。

才十七条

次の者は会員の資格を失う。
一、本会の会員にあるまじき行動・態度をとつた者。
一、正当な理由なくして三ヶ月以上会費を滞納した者。
一、無届で一ヶ月以上欠席した者。

才十四条

本会の経費は、会員の会費及びその他の収入金によつて充てらる。

才十五条

会員は入会金百円、一ヶ月につき五十円の会費を支払う義務を負う。会員は必ずその月末までに会計に支払わなければならない。

才十八条

本会の会則改正には会員の三分の二以上の賛成を必要とする。この会則は昭和三十四年四月十三日より効力を持つ。

附則

この会則は昭和三十四年四月十三日より効力を持つ。

編集後記

(編集委員序にかえて)

ここに、我々の唯一の機関誌のすたじすつわろ号ができた。本号は新入生歓迎号として成り立っており、一年生は自己紹介、二・三・四年生は、回想・心境を中心に述べている。この機関誌のすたじすつは、郷愁と一般に読まれるが、郷愁とは、どのようなにして感じられるだろうか。郷愁は歴史をふりかえりても感じられるし、また自然を見ても感じられるであらう。なんだか、郷愁とは、我々のクラブのため言葉のように思われてくる。

また、これは、一種の告白、つまり、自己の思想の表現である。この文集を讀むことによって、仲間の方の一片を感じたり、これからの我がクラブの団結を期していくことを期待する。その告白について、芥川竜之介が、俳僞の言葉に書いてあるの

を引用して、これを閉じる。

告白

完全に自己を告白することは何人にも出来ることではない。同時に又自己を告白せずには如何なる表現も出来るものではない。ルツリオは告白を好んだ人である。しかし赤裸々な彼自身は懺悔録の中にも発見できない。メリメは告白を嫌った人である。しかし「コロンバ」は隠約の間に彼自身を語っていないであらうか。しよせん告白又字とその他の文学との境界線は見分けほどはつきりしていないのである。俳僞の言葉より

*

(寺本忠司)

序の注

エントロピー entropy は、熱力学よりきた函数である。現在概念的にあつゆる科学に用いられている。

昭和43年度 名古屋大学郷土研究会 会員名簿・住所録

●4年生

- 工学部 / 津坂 峯隆 南区四条町4の4 TEL (691) 1966
- 理学部 / 樋口 清司 四日市市富田一丁目12の12 TEL 四時 65-4720
- 経済学部 山岸 章 海部郡甚目寺町西分宿(原宿55) 光和利子 TEL (海部0560) 44-418
〔富部郡地石川鼻石川郡鷺菜町月橋118〕

●3年生

- 工学部 梶浦 博一 四日市市富州原町8の12 TEL 四時 65-0547
- 経済学部 西川 義永 港区若栄町7の57 TEL (661) 2723

●2年生

- L2・11 伊藤 明徳 春日井市下市場町548 文学部 志望
- L2・14 西川 洋 一宮市時之島二本松西38 教育学部 志望
- ✓ L2・14 高橋 敏明 春日井市桃山町5225 文学部 志望
- S2・15 井村 正博 四日市市東富田町28の30 工学部 志望
- S2・32 寺本 忠司 昭和区白金町6の31 TEL (871) 0854 理学部 志望
- S2・51 塚本 政巳 北区名城町2の9 農学部 志望
- S2・53 杉浦 秀敏 碧海郡高浜町高取小林2の9 農学部 志望

1年生

✓ L1・21 池田 全

稲沢市日下部町松野438

法学部 志望

L1・23 杉浦 孝和

豊田市元城町2の48

法学部 志望

L1・31 平野 善敏

刈谷市小垣江東中根45の1

経済学部志望

L1・33 伴 金美

和歌山県大府町吉田平地12の1

経済学部志望

L1・33 吉田 忠史

豊橋市花中町178

経済学部志望

S1・21 百瀬 敏雄

和歌山県阿久比町福住

工学部 志望

S1・52 水野 猛

愛知県丹羽郡大口町豊田ニ見65

農学部 志望

S1・52 柴田 晋雄

一宮市宮西通り5の10

農学部 志望

L1・33 高木 義明

岐阜県不破郡関ヶ原町3125の8

経済学部志望

経済学部 志望



のすたるじす 為3号
—新入生歓迎号—

発行所:名古屋大学郷土研究会

発行日:昭和43年6月1日

編集委員長:寺本忠司

編集委員:西川義永・西川洋・柴田哲雄
・平野善敏・水野猛

((非売品))
